

# 幼児の楽器を通した表現

— 幼稚園における遊びの中での対話に焦点をあてて —

## Young Children's Expressions with Musical Instruments -Focusing on Dialogue during Play Activities in Kindergarten-

福島 さやか

Sayaka Fukushima

### はじめに

子どもたちを取りまく環境は変化している。新型コロナウイルス感染症の拡大の影響により、人々の生活が変化し、日常生活についてさまざまなことに配慮することとなった。幼稚園における子どもたちの生活も変化し、行事の進め方も変化した。音楽会の開催についても同様に人数の見直し、使用する楽器の見直し等が行われることとなった。それぞれの園で工夫や配慮をしながら実践が積み重ねられてきた。新型コロナウイルス感染症の位置づけは2023年5月8日から、新型インフルエンザ等感染症（いわゆる2類相当）から5類感染症に移行した。その後もそれぞれの園で状況に応じて実践が行われている。

本稿ではまず、『幼稚園教育要領』（平成29年告示）における幼児の楽器を通した表現に関する内容について述べる。その後遊びの定義、幼児期における主体的・対話的で深い学びについて、幼児と楽器、楽器、対話について述べる。そしてA幼稚園における年中クラスの楽器遊びの場面で見られた子どもたちの様子について、対話に焦点をあてて考察する。さらにA幼稚園の先生方を対象として行った質問紙調査の結果をもとに考察を行う。

### 1-1 『幼稚園教育要領』における幼児の楽器を通した表現に関する内容

幼児の楽器を通した表現に関する内容として、『幼稚園教育要領』（平成29年告示）<sup>1)</sup>では、第1章総則

において以下の記述が見られる。

第1章総則 第4 指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価

#### 3 指導計画の作成上の留意事項

- (2) 幼児が様々な人やものとの関わりを通して、多様な経験をし、心身の調和のとれた発達を促すようにしていくこと。その際、幼児の発達に即して主体的・対話的で深い学びが実現するようにするとともに、心を動かされる体験が次の活動を生み出すことを考慮し、一つ一つの体験が相互に結び付き、幼稚園生活が充実するようにすること。

また、第2章 領域「環境」では、周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養うことが示されている。ねらいには以下の記述が見られる。

#### 1 ねらい

- (2) 身近な環境に自ら関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。

さらに、第2章 領域「表現」では、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにすることが示されている。また、内容には以下の記述が見られる。

## 2 内 容

- (1) 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりなどして楽しむ。
- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。

上記のように、幼児が周囲のさまざまな環境に好奇心や探求心をもって関わることや、さまざまな音に気付いたり、感じたりして楽しむこと、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わうことが記されている。また、幼児がさまざまな人やものに関わる際、多様な経験や心身の調和のとれた発達を促すこと、主体的・対話的で深い学びが実現することも大切にされている。

### 1-2 遊びの定義について

小川 (2010)<sup>2)</sup> は、遊びの定義について以下のように述べている。第1に遊びは遊び手が自ら選んで取り組む活動である。第2には遊び手が他の目的のためにやる活動ではなく、遊ぶこと自体が目的となる活動である。第3に、その活動自体、楽しいとか喜びという感情に結びつく活動であろうということである。第4に、遊びは自ら進んでその活動に参加しなければ、味わうことができないということである。

上記では、遊びは子どもたち自身が取り組みたいと思うことが重視されている。

### 1-3 幼児期における主体的・対話的で深い学び

片岡 (2022)<sup>3)</sup> は、幼児教育における「主体的・対話的で深い学び」の意義について述べている。幼児教育における「対話的な学び」について、以下のように記している。身の回りの環境に関わっていく中で、教師や友達との関わりが生まれ、その関わりがつながり広がっていくことにより、自分の考えを広げ深めていくこと。また、「主体的・対話的で深い学び」の実現にむけて、指導の在り方・工夫については(1)「動き出す」、(2)「ためこむ」、(3)「関連づける」の視点で支えることを記している。(1)では園での安心の基盤が確立されていることの必要性が示されている。(2)では幼児

の内面を理解し、「やりたい」が生まれるような環境を工夫することが示されている。ここでは、意図的な声掛けやものの提示などにより新しい問いを示し、幼児の更なる探求を仕掛けていくことも必要とされている。(3)では①遊びを振り返る機会を設けること、②心ゆくまで追求してきた結果として自身の中にためこんだ知識や技能、様々な感情や未来への思いなどをアウトプットする機会を計画的に設けることが示されている。

以上のように、幼児が環境に関わるなかで周りの人との関わりが生じ、その関わりがつながることで自らの考えが広がり深まることが記されている。活動を行う際には安心して活動に取り組めるような環境が必要であり、子どもたちの更なる探求を支え、さらに次の活動へとつないでいくことが示されている。

### 1-4 幼児と楽器

幼児と楽器については、幼児の音楽的表現に関連する書籍のなかでさまざまな視点から記述が見られる。例えば「子どもはとにかく音に対する好奇心が旺盛である。さわってみたくてたまらない気持ちになる。そんな気持ちを大切にしなければならない。」<sup>4)</sup>「幼児は音の出るものに興味を示す。特に、目新しい楽器との出会いはそうした気持ちの強く現れる場面となる。」<sup>5)</sup>などの記述が見られる。また、幼児にとって良い楽器については「幼児の身体的発達を考慮し、音質や響きに注意が払われていること。」「①操作が簡単なもの、②音色の美しいもの、③丈夫なもの」<sup>6)</sup>が挙げられている。

上記のように、幼児の楽器を用いた音楽表現を支えていく際には、発達段階や興味・関心に配慮した楽器の選択も重要となる。

### 1-5 楽 器

今回楽器遊びの活動で使用された楽器について、以下に『ニューグローヴ世界音楽大事典』に記されている説明の一部を記す。

### 【トライアングル】<sup>7)</sup>

金属棒を正三角形（もしくは二等辺三角形）に曲げ、角のうち1つが開いている体鳴楽器。18世紀末までトライアングルはもっぱらリズム楽器であった。

### 【タンバリン】<sup>8)</sup>

小型の片面の杵太鼓。中近東に起源を持つが、その形は長い歴史を経て現在に至るまでほとんど変化がない。

### 【グイロ】<sup>9)</sup>

瓢箪（ひょうたんもしくはその代替物）の表面に刻み目を入れた搔擦楽器。カリブ海、パナマ、南アメリカなどで広く使われている。

### 【マラカス】<sup>10)</sup>

一対の瓢箪製ラトル（がらがら）で、一般的には楕円形。自然乾燥させた果実の種子が瓢箪の中に入っている。瓢箪の代用としては、木、枝編み細工、ベークライト、金属のものなどもあり、ビーズ、小さな玉などのがらがら鳴るものが入っている。マラカスは、ウェスタン・リズムバンドや打楽器合奏に取り入れられている。また、ラテン・アメリカ・オーケストラのリズムセクションにおいては欠くことのできないものとなっており、そこではリズムのオスティナートを奏する。

### 【小太鼓】<sup>11)</sup>

小太鼓は各国でさまざまな名称で呼ばれている。現在知られている最古の小太鼓は中世のテイバーで、13世紀から14世紀の芸術作品に明確に表現されている。20世紀の作曲家は、リズムを表現する手段として小太鼓を最大限に利用し、その豊かな音色を可能な限り引き出した。

### 【ハンドベル】<sup>12)</sup>

手で持って鳴らせるように、取っ手（柄または輪）が付いたベル、通常、内部に舌（クラッパー）があり、振って音を出す、固定してマレットでたたく場合もある。ハンドベルは音高、リズム、音色の3要素を具えた楽器として音楽の中で使われ、その深遠な音色のため古代から宗教音楽で用いられることが多かった。

### 【木琴】<sup>13)</sup>

発音体に木、竹、あるいは合成素材の音板を用いて、音列の順に並べた打楽器。木琴の起源は定かではない。最も古いものは14世紀にさかのぼり、木琴分布の2大主要地域であるアフリカとインドネシアから見つかっている。

### 【ウッドブロック】<sup>14)</sup>

割れ目太鼓の一属で、チーク材や類似の硬い木に1本または2本の細長い溝をつけた体鳴楽器。円筒形と角形の2種類ある。音色はよく響き、よく通る。

上記のように、それぞれの楽器が音色や形、奏法などさまざまな特徴をもっている。楽器を用いることは、他国の文化に触れることにもつながっている。

トライアングルについては、中世の教会で宗教目的に用いられたことは間違いなく、天使が手に持って歌いながら演奏している姿がよく見られること、1710年にハンブルク歌劇場で使われた記録があること、17年にはドレスデン歌劇場が2つのトライアングルを購入していることなどが記されている。木琴について、ヨーロッパの木琴に関する記述は1511年のシュリックによるものが最初であること、彼は木琴を「木のかたかた」と呼んだことも記されている。このようになり長い歴史をもつ楽器が含まれていることも確認できる。タンバリンは長い歴史を経ているものの、形がほとんど変化していないことが記されている。

マラカスには、女神がいくつかの白い石を瓢箪の中に入れてマラカを作ったというギニアの伝説も記されている。さらに、マラカスはラテン・アメリカの初等学校においてもまた重要な楽器であることが記されている。このように伝説や初等教育にもつながるような内容が含まれている。

また、ハンドベルについては、現存する最古のハンドベルは中国のもので鐃（ナオ）と呼ばれ、紀元前1600年頃のものであること、中国の記録にはさらに古いハンドベルについての記述があり、ベルの音には人知を超えた力があるとしていることが紹介されている。このように深遠な楽器であることが示されている。

また「太鼓」は、ほとんどすべての時代のなかで、

世界のさまざまな地域や民族に広く分布しており、その形状や用法も多様であることが記されている。楽器のもつ多様性についても今後子どもたちが理解を深めていくことが考えられる。

## 1-6 対話

対話について、『現代教育学事典』では以下のように記されている。「通常、向かい合って話をするという程度の意味だが、歴史的にみるとこの語にはもっと深い意味がある。・・・弁証法とあいまって真実を共同で探求するための方法という意味合いを内にふくんでいた。・・・教育においてこの言葉を使う場合は・・・子どもを心の深部から把握し子どもに学びながら教育的関係をたえず形成し直す方法、否定を繰り返しながら真理・真実に接近する方法などが含有されていると考えられる。」<sup>15)</sup>

上記のように、対話という視点から幼児の活動を考えていく際には、子どもを深く把握し、子どもに学びながら教育的関係をたえず形成し直すなどの意味も含め検討を進めて行く必要があると考えられる。

## 2 A 幼稚園における音楽会にむけた取り組み

### 2-1 A 幼稚園における楽器遊びの活動

20××年9月12日10:30～10:45に、音楽発表会にむけた取り組みの一部として楽器遊びが行われた。A幼稚園では毎年12月に音楽会が開催されている。音楽会は年少、年中、年長クラスの全員が参加する行事である。今回の実践事例は年中クラス(22名)の内容である。年少クラスでの経験をもとに、年中クラスになって初めて出会う楽器との関わりを含めながら活動が展開している。筆者は非参与観察を行った。園長先生に研究の目的、方法等について説明を行い許可を得た後に観察、記録、質問紙調査を行っている。

### 2-2 楽器遊びに使用された楽器

今回の楽器遊びで使用された楽器は、以下に記す8種類であった。また、1から8の順番でクラス担任の先生から子どもたちに活動の冒頭で楽器の紹介が行われた。

- 1 【トライアングル】既習の楽器。
- 2 【ヘッドレスタンバリン】タンバリンは既習の楽器ではあるが形が異なるヘッドレスタンバリンを提示。
- 3 【グイロ】新しく触れる楽器。
- 4 【マラカス】大きなマラカスと小さなマラカスを両方提示。
- 5 【小太鼓】新しく触れる楽器。既習の大太鼓と比較しながら提示。
- 6 【ハンドベル】新しく触れる楽器。ド、レ、ミ、ファ、ソ、の5つの音を順番に提示。
- 7 【木琴】新しく触れる楽器。3つ並べて配置。
- 8 【ウッドブロック】新しく触れる楽器。

年少時に既に習ったことのある楽器から紹介が始まっている。タンバリンは既習の楽器であるが、ヘッドレスタンバリンを提示して、教師は鼓面がないことを口頭で説明した後、手を使って大きな動きとともに鼓面がないことを説明している。グイロは新しく触れる楽器であった。マラカスは、大きなマラカスと小さなマラカスの両方を同時に示す方法が採られている。ウッドブロックは新しく触れる楽器であった。小太鼓は、既習の大太鼓と比較して奏法の説明も加えながら提示されている。ハンドベルは新しく触れる楽器であった。教師は5音に限定して提示している。子どもに提示する前に、ドレミファソの音の並びにハンドベルを並び替えた後に順番にドレミファソと鳴らしていた。木琴も新しく触れる楽器である。3つ並べて配置されていた。比較しやすい環境にも配慮されている。

## 3 楽器遊びの活動における対話

15分間の活動について、すべてクラスの教室で行われた。Ⅰ楽器紹介、Ⅱ楽器遊び、Ⅲ振り返りの3つの場面に分けられた。それぞれの場面における対話に関連する内容の一部について以下に述べる<sup>16)</sup>。囲み線中の波線は重要と考えられる箇所を示している。Tは教師を、Cは子どもを示している。※は筆者注)を示している。

### 3-1 楽器紹介の場面

#### 【ギロ】

1分23秒

T:「みんながずっと気になっていたこれ、何か知ってる？」

C:「バットみたい！」 C:「知らない。」※形を見て、これまでに経験した内容と関わらせて発言している。

1分32秒

T:「ここがね、ぼこぼこぼこぼこ・・・ってなってる。見える？ぼこぼこぼこぼこって。」

C:「見える。」

1分41秒

T:「棒を使って、どうしたらいいかな？」※問いかけがある。

C:「ズーってする。」※奏法についても予想して発言している。

1分50秒：音色や奏法に着目する。

T:「♪（ギロの楽器の音を鳴らす）。」「どう？どんな音？」※音について、子どもたちに問いかけている。

C:「いい音～。」※音色について述べている。

ギロに関しては、まず子どもたちが形について発言している。教師は楽器のさらに細かい部分について「ぼこぼこぼこぼこ」という言葉を2回使用して着目するよう促している。奏法については教師が説明してしまうのではなく「どうしたらいいかな？」と問いかけて子どもたちが予想して答えている。さらに、音色についても教師が発言するのではなく、子どもたちがどう感じたのかを大切に、引き出している。「いい音～」と子どもたちは述べている。

#### 【マラカス】

2分19秒

C:「マラカスを演奏する動きをする子どもがいる。」

T:「(上記の子どもの動きを受けて)「あ。よく知ってるね。」※子どもを褒める発言がある。

2分32秒

T:「ふりふりふりふりってしたら、音がね、鳴ります。」※子どもが分かりやすい説明を行っている。

2分33秒

T:「おっきいマラカスと、ちっちゃいミニミニマラカスがあるのね。」※子どもが興味をもつ。

C:「音が鳴る。」※音について、関心をもっている。

T:「音はね、同じような音がします。」※すぐに楽器を演奏する音を交えながら答える。

2分43秒

C:「太きいのは、マシュマロみたい！」※形にも興味をもっている。

T:「本当ね。」※すぐに認める発言がある。

マラカスに関しては、動きを伴う表現が多数見られた。教師は小さいマラカスについて「ミニミニマラカス」と表現して子どもたちが楽器に親しみやすいよう配慮し、楽器の呼び方についても工夫されている。教師が小さいマラカスについて形が小さいことを指摘して説明を終えようとした際、子どもの方から「音が鳴る。」と音が気になっているような発言があった。すぐに教師は楽器を演奏する音を交えて答えている。また子どもは、楽器の形についても大きいマラカスはマシュマロのようであると表現している。

#### 【ウッドブロック】

5分08秒

T:「これ知ってる？」

C:「知らない。」

C:「前、大きい組さん(年長クラス)やった。」※前年度の音楽会の経験をもとにした発言。

5分27秒

T:「赤と白がある・・・。」(※ウッドブロックに色テープが貼ってある。)

C:「どっちでもいい。」※奏法についてどちらも打つことが可能であることを予想して答えている。

5分46秒

T:「初めて見たね。みんなこれね。」※子どもた

ちの経験をふまえた発言が行われている。

C：「うん。」

5分55秒

T：「どれかやってみたい楽器、見つけた？」

C：「見つけた。」※活動の見通しに関する発言が行われている。

・およそ6分程度ですべての楽器の紹介を終了し、今後の進め方を30秒程度で説明する。

教師は丁寧に1つひとつの楽器を紹介している。子どもたちの方から、前年度の年長クラスの演奏に関する発言があった。また、楽器の奏法についても子どもたちは予想して自分たちで答えている。楽器についてイメージが広がった後、最後に教師はやってみたい楽器が見つかったかどうかしっかりと確認した後、30秒程度で短く今後の動きを説明して、子どもたちは楽器遊びの活動に進んでいる。ここでは子どもたちの活動時間の確保に配慮されている。

### 3-2 楽器遊びの場面

【木琴】8分37秒～8分53秒

グリッサンドも行う。※友だちの演奏する様子も見ている場面が確認できる。

【ハンドベル】9分00秒～9分10秒

いろんなベルを鳴らして音を確認する姿が見られる。友だちと一緒に鳴らす姿も見られる。※友だちとの関わりが確認できる。

【小太鼓】11分34秒～11分55秒

1人ひとり、並んで順番に太鼓を打つ。※比較的長い時間打つ子ども、短い時間打つ子どもの両者が見られる。4人の子どもがそれぞれ異なったリズムを打っている。

【グイロ】12分00秒～12分12秒

ビーターを動かしながら音色をしっかりと確かめる様子。(個人)

【マラカス(大・小)】13分06秒～13分20秒

※教師の動きを真似するような動きもみられる。大きなマラカスの演奏を楽しむ様子。(個人) ➡ 友だちの様子を見た後、他の子どもも、小さなマラカスの音を鳴らしてみる。(個人)

【ウッドブロック】13分41秒～13分45秒

楽器の先端の部分も叩いてみる様子が確認できる。(個人) ※自由に楽器の音を探究する姿が確認できる。

上記のように、友だちの演奏する姿を見たり、一緒に楽器を鳴らしたり、個人で音を探索するなど、子どもが楽器と深く関わる、楽器や音をとおして友だちと関わるさまざまな活動が見られた。教師の動きを真似して楽しい活動が展開するような動きも見られた。

### 3-3 振り返りの場面

振り返りの冒頭では、教師がどの楽器が好きだったのか、なぜ好きだったのか具体的に尋ねている。子どもたちは考え始め、振り返りが始まって37秒経過したところで、子どもが理由も含めて答える姿が見られ始めた。3-2 楽器遊び終了時では太鼓が楽しかったと答える声が多数聞かれ、太鼓の演奏の楽しさが伝わってきた。しかし3-3 振り返りの時間に1人ひとり個別に尋ねてみると、どの楽器が好きだったのかは1人ひとり楽器が異なる様子や、理由もそれぞれであることが分かる。振り返りを行う際に、教師は楽器の擬音語を用いて具体的に示し、楽器を演奏する際の手の動きを交えながら発言している。また子どもとしっかりと目を合わせ、名前を呼び、うなずきながら対話する姿が印象的である。

このように、子どもの言葉をしっかりと受け取る姿勢は子どもが安心して発言する際に大変重要なことと考える。

05秒

T：「〇〇くん、上手に叩きよったね。なんで太鼓が好きやったと？」

T：「ダダダダ ダダダダ ダダダダ ダンって叩けたから？」

C：「違う。」

T：「おおっ。」

37秒

C：「太鼓がよかった。」

T：「太鼓がよかった。何で太鼓がよかった？」

C：「かっこいい。」

T:「かっこいい！かっこよかったね。音がたくさん鳴ったもんねえ。」

1分4秒

T:「じゃあ、〇〇ちゃん、何がよかった？」

C:「タンバリン。」

T:「タンバリン。どうしてタンバリンがよかったの？」

C:「チリンチリンが好きだった。」

1分22秒

C:「トライアングル。」

T:「トライアングル？何でトライアングルが好きだったの？」

C:「かわいい音がする。」

1分33秒

T: (演奏する手の動きを交えながら)「チリリリリリーンっていいよったとね。へえー。」

ため、SI遊びと関連する内容も質問項目に含めている。

(1)については、以下の回答があった。「リトミック等を通して音楽に合わせて体を動かす楽しさを知ってほしい。」「とにかく、音を楽しむことが音楽だと伝えたい。」「楽器の使い方や持ち方、歌う時の声（叫んでうたうなど）」「子ども自身が音で表現することを楽しむ。」「音楽を通して創造力や表現力を豊かにしたり、子どもの頃により沢山音楽に触れていくことは大切な事だと思います。」「子どもたちが楽しみながら、音や楽器に触れること。」「以上のように、身体表現を伴う活動や、歌唱表現に関連する内容も現れている。さらに、鑑賞、音や音楽を創り出していくような活動等、さまざまな活動を通して幼児の豊かな音楽表現を支えていくことが考えられる。

(2)については、以下の回答があった。「私の方を見てほしい時に、手をたたいてリズムを取ると、自然と子どもも手をたたき、真似をして注目してくれた。」「リトミックが好きではなく、いつも座って見ていた子が、友だちが楽しそうにしているのを見て自ら参加してくれたこと。」「楽しんでいると、他のパートまですぐに覚えて、口ずさむ。」「いつも歌っている。」「「家でも歌ってます！」と喜んで（お家の方に）伝えられること。」「音楽会の練習のとき、給食のとき、自由あそびのときに曲を流すと自然と手でリズムをとっていた。」「動物を音の大きさに例えて、子どもたちが体全体で表現を楽しむこと。」「年長では、気持ちの込め方やどのように歌うかを伝え、子どもたちの歌い方がよりよくどんどん変わっていく事に成長を感じました。」「子ども同士で覚えたリズムを口ずさみながら、楽しんでいた。」「以上のように、子どもたちの音楽表現では真似をすること、口ずさむこと、自然にリズムをとることの重要性が考えられる。また家庭でも歌に親しむこと、体全体で表現することとのつながり、表現の工夫など、さまざまな音に関する広がりや深まりが確認できる。

(3)については、以下の回答があった。「以前は全学年の保護者の前で発表していたので子どもたちはとても緊張していたと思う。今は自分の親を子どもが見つけることができ安心して演奏ができていると思う。」「感染症対策でマスク着用で歌ったことがあった

#### 4 質問紙調査

20××年9月3日から9月12日にかけて、A幼稚園における先生方を対象として質問紙による調査を行った。7件の回答を得た。質問項目は、以下の8項目であった。

- (1) 幼児の音楽表現について（考えていらっしゃるごと、課題など。）
- (2) 幼児の音楽表現で印象に残っているエピソード（可能であれば、対話、子どもの自発的な活動などとも関連して。）
- (3) コロナ禍の音楽会を経てお考えになっいらっしゃるごと（変化したこと、変化させていないところなど。）
- (4) 音楽会で大切にされていること、ねらい、園の行事のなかでの位置づけ
- (5) 幼児の楽器に関する表現で大切にされていること、課題と思われること
- (6) 創造性と音楽表現の関連について（SI遊びとの関連、園の目標との関連）
- (7) 保護者との連携
- (8) 特別な配慮を必要とする幼児への指導について  
A幼稚園では、SI遊びの活動も大切にされている

が、呼吸のしづらさや表情が伝わりづらいことが残念だった。歌を歌うことは、耳からだけでなく、目からの刺激もとても大切だと感じた。」「コロナ禍の中では、ピアノをやめていましたが、今はいつも通りに戻っています。」以上のように、変化したことも、戻ったこともあることが確認できる。また、変化を経て改めて演奏する際の視覚からの情報の大切さも指摘されており、演奏をすることについて改めて考えることにもつながっている。

(4)については、以下の回答があった。「1人ではなく、クラスみんなですることという事を心がけています。」「みんなで1つの曲を演奏する楽しさを知る。」「立ち位置、みんな主役、ひとりひとりの役割の大切さ、楽しむこと。」「クラスみんなが心を1つにして、いろんな楽器で1つの曲を完成させること。」「皆で1つのものを作り上げる達成感を味わってほしい。」「音楽に触れ、楽しみながら楽器を叩いていく。クラスのチームワークを高めることができる。」以上のように、クラスの皆で行うことを大切にしながらも、1人ひとりを大切にすることも重視されている。また、楽しみながら活動を行うことが重視されている。以前 A 幼稚園の主任の先生に確認した際にも、最も大切にしていることは楽しむことであり、「楽しかった」と子どもたちが感じることを大きなねらいとしているとの説明を受けている。音楽会の伝統が受け継がれている。

(5)については、以下の回答があった。「自分からやってみたいという気になるようにすること。」「楽器の持ち方は正しく持つようにしている。」「正しい持ち方、姿勢など。」「よりよい音がでるにはどうとりくむか?」「好きなように演奏する時、みんなでする時のメリハリ。」「全員が、楽器に興味をもって、音の出し方や違いを知ること。」「子どもが楽しく演奏できることを大切にしています。」以上のように、楽しく演奏することも重視しながら、一方で演奏技術や知識に関する内容も大切にされている。音色への更なる探求や子どもの心情への配慮も重視されている。

(6)については、以下の回答があった。「集中力」「自分の思いや考えを表現する」以上のように、SI 遊びや園の方針との関連も考えられる。

(7)については、以下の回答があった。「個人の、がんばる姿を伝える。成長や楽しみ(楽しんでいること)

を伝える。」「音楽会などを通して、子どもの成長を感じてもらう。」以上のように、子どもの成長と一緒に感じることも大切にされている。

(8)については、以下の回答があった。「むりせず、自分からやりたいと思える楽器を提示したり、練習をやりたくない時はむりせず自分から参加するまで待つ。」「練習も強制的にさせるのではなく、本人がやりたいと思っている時に参加するようにして、楽しい時間を過ごせるように心がけている。(子どもによって対応は違います。))」「より持ちやすいものを、よりやりやすいよう、工夫。」「本人がやりたい気持ちになった時にたくさん褒めて「やりたい」と思う気持ちが強くなるようにすること。無理やりさせない。」「その子の気持ちを重視して、一緒に音楽表現を楽しむことや声掛けを行う。」「隣について、講師の説明と追加で声掛けを行ったり、褒めることで出来た事への嬉しさや楽しさを知ってもらえるようにしています。」「その子1人ひとりに合わせながら、様子を見てできそうな所や、楽しめそうな所で、参加してもらっています。」以上のように、子どもの気持ちに寄り添って、楽しい活動となるような配慮が大切にされている。

## 5 総 括

今回の楽器遊びは、音楽会にむけた取り組みの1つとして、前年度の年少時の経験をもとに、クラス全員で新しい楽器との出会いを含めて活動が進められた。Ⅰ楽器紹介場面では、子どもたちも積極的に楽器の形や音色、奏法に関連して発言して体で表現する様子も確認できた。形や奏法に関する内容などについて教師が丁寧に子どもたちに問いかける場面が含まれていた。Ⅱ楽器遊びの場面では、子どもたちの様子には、友だちとの関わりのなかで、積極的に楽器を探求する姿とともに、個人で楽器の音を探求する姿が見られた。自由に表現しながら探求する姿も見られた。Ⅲ振り返りの場面では、友だちの意見をきく、自分の考えを整理するような内容が含まれていた。

今回はいつも一緒に生活しているクラスでの活動であり、担任の先生を中心として活動が進んでいる。子どもが安心してのびのびと活動できる時間であったと考えられる。子どもたちが楽器と深く関わり、子ども



の楽器を通した友だちとの関わりのなかで楽しむ様子が見られた。また子どもたちと教師の豊かなコミュニケーション、対話を確認できた。タンバリンは鼓面がないものを提示する、マラカスは大きいものと小さいものの両方を提示する、ハンドベルは5音に限定して提示する、木琴は3つ並べて配置する、などの環境構成の工夫が行われていた。また、時間配分も子どもたちが楽しく活動できる時間が確保されていた。クラス担任の先生の明るく楽しい雰囲気での楽器紹介や子どもたちの楽器探究活動とともに、クラス担任の先生以外の先生方とのチームワークのよさも今回の活動に影響していると考えられる。子どもたちの豊かな音楽表現を支える支援が見られた。

## おわりに

A 幼稚園音楽会開催日当日、園長先生から保護者に対する話のなかで、以下のような言葉が述べられていた。「子どもたちが責任をもって自分のパートを担当して演奏している姿が見られます。これは機械的なものではありません。演奏を通して考えて解決する力も育っています。自分なりに考えて進めていくこと、この力は一生大切なことです。」

今後より深く検討していく視点として、①幼児が楽器と関わることの意味、②個々の表現と集団の表現、そして③子どもたちの音に関する表現について改めて考える、以上3つの視点が考えられる。

## 注)

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領（平成29年告示）』東山書房、2018
- 2) 小川博久『遊び保育論』萌文書林、2010、p.46
- 3) 片岡元子「幼児教育における「主体的・対話的で深い学び」の意義」文部科学省教育課程課・幼児教育課 編『初等教育資料』令和4年10月号（No.1025）、東洋館出版社、2022、pp.96-99
- 4) 梁島章子ほか共著『改訂新版 感性と表現のための音楽』学術図書出版社、2009、pp.73-74
- 5) 井口太・水崎誠編著『改訂版 最新・幼児の音楽教育』2024、p.114

- 6) 小林美実監修・指導『表現 幼児音楽1』保育出版社、2009、p.95
- 7) 『ニューグローヴ世界音楽大事典11』講談社、1994、pp.568-569 トライアングル
- 8) 『ニューグローヴ世界音楽大事典10』講談社、1994、pp.401-402 タンバリン
- 9) 『ニューグローヴ世界音楽大事典5』講談社、1993、p.452 ギロ
- 10) 『ニューグローヴ世界音楽大事典17』講談社、1994、p.451 マラカス
- 11) 『ニューグローヴ世界音楽大事典10』講談社、1994、pp.168-170 小太鼓
- 12) 『ニューグローヴ世界音楽大事典14』講談社、1994、pp.37-38 ハンドベル
- 13) 『ニューグローヴ世界音楽大事典18』講談社、1995、pp.377-378 木琴
- 14) 『ニューグローヴ世界音楽大事典3』講談社、1993、p.124 ウッドブロック
- 15) 青木一ほか編集『現代教育学事典』1988、労働旬報社、p.524 対話（汐見稔幸）
- 16) I 楽器紹介及びII楽器遊び、III振り返りの2つに分けて動画を記録している。I 楽器紹介及びII楽器遊びの進行はクラス担任の先生が、III振り返りの進行については園長先生が担当して進められている。

## 付 記

本論文は国際幼児教育学会第45回大会音楽シンポジウム「主体的で対話的な音楽表現の可能性について」における福島県口頭発表分について、加筆・修正を行ったものである。口頭発表のテーマは「幼稚園の楽器に関する音楽表現について」であった。

## 謝 辞

ご協力いただきましたA幼稚園関係者の皆様に心より感謝申し上げます。